

## Web-based Autonomous Learning in the English Curriculum of Kyushu University

Suzuki Yubun  
The Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/1335712>

---

出版情報：英語英文学論叢. 58, pp.11-20, 2008. 九州大学英語英文学研究会  
バージョン：  
権利関係：

# 大学英語カリキュラムでの大規模自律学習の展開

— 九州大学の場合 —

鈴木右文

## 1 はじめに

本稿では、2006年度に九州大学で改定された新英語カリキュラムに導入された、ウェブ教材を使用した自律学習による必修科目の展開に関して、データに基づいた考察を加え、今後の同科目の有意義な展開への提言を通して、大学英語教育におけるコンピュータ利用の自律学習の発展に寄与することを目的とする。

## 2 九州大学の新英語カリキュラム

九州大学では2006年度より英語新カリキュラムが導入された。第1外国語として英語を選択した場合、原則として文系学部は7単位、理系学部は6単位が必修となる。内容は4種類あり、以下のようになっている。

- ・英語Ⅰ：1年前期： 40-80名：大学英語学習の基盤形成上の基礎知識を習得
- ・英語ⅡA：1年前期： 20-25名：パラグラフィティングとプレゼンテーション
- ・英語ⅡB：1年後期： 50-130名：読解、聴解、文法の自律学習中級
- ・英語ⅢA：1年後期： 20-25名：エッセイライティングとプレゼンテーション
- ・英語ⅢB：2年前期： 50-130名：読解、聴解、文法の自律学習上級
- ・英語Ⅳ：2年前期： 50名前後：アラカルト方式（この学期は文系学部のみ開講）  
2年後期： 50名前後：アラカルト方式

## 3 B型科目の目的

その4種類のうちのひとつであるB型科目（筆者独自の呼称）は、多

様な目的を持っている。まず自律学習の導入が目的として挙げられる。リーディングやリスニングといった受信型技能は、シンプルな訓練を積み上げていく必要があり、学習者によって読む速度が異なったり、学習を進めるのに適したペースが異なったりする。この観点からは、受講者が一斉に同一のペースで学習を進める授業よりも、個人のペースで進められる自律学習が適していると言える。これは、作文や口頭プレゼンテーションのように、生身の人間である他の受講者に読んでもらいあるいは聞いてもらってフィードバックを得たりする授業や、協同で成果物を作っていくプロジェクト型の授業のように、仲間がそろって一斉に同じ作業をすることが有意義であるタイプのものとは異なる点である。文法の学習についても一斉授業こそ適していると考えられる理由は見当たらない。

また、大規模クラス運用も目的のひとつである。同じ教員数で、もしくは定員削減や人事凍結や人事ポイント制や非常勤講師枠の削減などによってより少ない教員数で英語カリキュラムを運営していかなければならない昨今であるが、これに加えて、論文作成やプレゼンテーション技能といった、学術目的で使用する英語産出の技能についても大学英語教育に求められており、少人数での英語産出技能教育も必要となってきた。このような状況では、少人数教育の実現のためには、一方で大人数教育も導入せざるを得ない状況である。そのために英語Ⅰが2006年のカリキュラム改定よりも前から導入され、共通教科書の使用、共通小テスト・共通定期試験（全く同一の問題ということではなく、出題素材や出題様式に枠があるということ）といった規格化、ティーチング・アシスタント（TA）による補助といった工夫によって、授業の効果を損なうことなく1クラス当たりの受講者数を増やすことを目指したのだが、これだけでは十分ではない。外国語科目の担当者は、外国語以外の全学教育、大学院教育、大学院共通教育等にも関与しており、担当授業数の増加によって対応することは事実上無理である。そこでB型科目が自律学習を導入すれば、自律である以上、同一の教室に何人の学習者が座っているかは、ひとりひとりの学習内容に影響を与えない。従って教室の収容数に応じて1クラスあたりの受講者数を増やすことができるということである。もちろん、受講者数が増加すると成績評価の手間が増大するため、単純に受講者数はいくら多くてもいいとは言えないのだが、学生数に圧倒されて授業本体がやりにくいということがないだけでも負担

感は低いと言える。

さらに、コンピュータ・ネットワークを利用していることで、教員側がひとりひとりの学習状況やクラス全体としての様子を詳細に把握できる。このような LMS (learning management system) は、例えば紙の教科書で行う読解の一斉授業では実現できないことである。

#### 4 実施方法

この B 型科目は、1 年次前期で大学英語学習の基盤形成を果たし、1 年次前期中に 1 年生が一斉に受験する TOEFL-ITP によりリーディングとリスニングの力を客観的数値によって把握した英語学習者が、1 年次後期・2 年次前期に連続集中してリーディングとリスニングを中心とした訓練を行うものである (TOEFL, TOEIC, 学内実施の TOEFL-ITP による単位認定はこの B 型科目に関して行われる)。

使用する教材は、広島市立大学の青木信之教授と渡辺智恵准教授により 2003 年度より開発中のコンテンツに広島市内の業者が開発したプラットフォームを組み合わせた「ぎゅっと e」と呼ばれるもので、広島市立大学や広島市民に利用されていて、さまざまなコースがあるが、九州大学ではリーディング、リスニング、グラマーのコースを採用している。1 年次後期の英語 II B のリーディングとリスニングは中級 (教材の設計上 TOEIC450-650)、2 年次前期の英語 III B では上級 (教材の設計上 TOEIC600-800) になっている。この教材は、鳴り物入りの賑やかなスタイルは採らず、サーキットトレーニングのようにドリルをこなしていくタイプの作りになっており、学習者の積極的取り組みが必要となっている。

九州大学で外国語教育を展開する六本松キャンパス (2009 年 4 月には郊外へ移転予定) には、外国語教育で使用しているコンピュータ教室は 5 室あり、収容能力は 332 名 (5 つの教室で 64 名 + 81 名 + 67 名 + 50 名 + 70 名) となっている。これらの教室を有効利用して 1 学年約 2500 名を収容し、昼間の空き時間や夕方以降は原則として授業以外での学習に開放している。授業では、これら 5 つの教室を同時に使用することが多いが、時間割上の開講クラス数は 3、担当教員も 3、TA が 2 で運用している。5 つの教室のうち 1 つは教員 1 のみで担当するが、残る 4 教室は 2 教室当たりを教員 1 TA 1 で担当する。質問の受付や自律学習の

監督に1教室あたり1名が付く形であるが、工夫で乗り切るべき難点として、授業初回のオリエンテーションを1つの教室に2教室分の受講者を集めて実施する必要があること、通常の授業の中で教員による口頭での連絡や指導が教室ごとに行われて二度手間になることなどが挙げられる。前者については、通路や壁際での立ち見で何とか対応しているが、後者についてはなかなか難しい。一方の教室では授業開始時刻に話を始め、終了したら学習に移ってもらえばよいのであるが、その後教員がもう一方の教室に移動する頃には既に学習が始まっており、ひとりひとりが異なるペースで進めているため、教員が入室した段階ですぐには止められない作業（読む速度を計測中、リスニングの問題を聞いている、など）をしている受講者が当面の作業を終えるまでやや時間がかかる上、問題を解く所要時間を採点ボタンのクリックからその次の問題の採点ボタンのクリックまでで計測しているため、手を休めて教員の話に耳を傾けているうちに、解答にかかる時間の平均値データなどが狂っていく。この場合、はじめに連絡・指導を始める教室を授業回ごとに交替するなどして公平を図らなくてはならないであろう。2教室を1人の教員が担当している場合、隣り合わせの教室では行き来する扉のあたりで話をすれば一度で済ませることもできるが、数十m離れているパターンではその手は使えない。ワイヤレスマイクその他で何とか一度で連絡・指導が済むように改善することが望ましいであろう。

2007年度後期の授業では、教員が受講に必要な説明を与えたあと、受講者は受講期間中、授業時間中はわずかの連絡・指導の時間以外は自律学習に取り組み、授業以外でも大学のコンピュータ教室や自宅のコンピュータで学習を継続し、およそ4ヶ月弱の間に、リーディングでは200-300語程度の英文に対して10問の設問がある問題を40題、リスニングでは約800問、グラマーでは400問強の学習分量となっている。受講者の平均的な解答時間からすると、これは13回の授業時間をすべて休みなく学習にあてて何とか終了するくらいの分量である。しかし実際にはオリエンテーションや連絡・指導を聞く時間があり、数回の間試験の時間があり、中間試験に備えた復習の時間が必要であり、コンピュータ画面とのにらめっこの途中で休憩を取ることもあるであろうし、様々な公的私的的理由によって学習が思うように進まない週もあるであろうし、学習者の半数はこの平均的ペースよりも遅い学習速度で進めるのである

から、実際には授業時間内だけの学習で全問終わるケースが多いとは考えにくい。そもそも教員側としては、授業以外でも学習することを前提に、学習の頻度を上げることによって、英語学習の効果を高めようという意図があった。

学生が自律学習を行っている間の教員及びTAの役割は大きい。教員に話を絞るが、オリエンテーションの実施、連絡・指導の実施、自律学習中の質問への対応の他、受講者の学習状況を各種データで確認し、クラス全体や特定個人への指導内容を電子掲示板や教材内メールに書き出す作業があり、暇な時間はない。指導の素材にするクラス平均や個人のデータには以下のようなものがある。

- ・週毎のログイン回数
- ・週毎のログイン時間
- ・週毎の消化状況、最終消化問題数予想
- ・問題毎の消化人数、正解率、所要時間（リーディングでは平均リーディング速度も）
- ・復習した問題数

## 5 主な改善

2006年度後期と2007年度前期においては、正解率の低い問題等を中心に、授業の中で教員が口頭で20-30分解説を行う時間が毎回の授業で設定されていた。これは、完全な自律学習の形にしてしまうと教員の出席がなくなってしまうかもしれないとの警戒心から設定されたことなのであるが、受講者にとっては評判のよくないことであった。そもそも人間の教師が介在する中で受講者が一丸となって取り組む学習と、個人が自律学習する部分とは、きちんと棲み分けをして、それらが同居している場合に比べて全体として効果を高めようということが狙いなのであるから、自律学習を意図した授業では、対面授業の要素をかなりの部分含めようというのは、集中して自律学習をしようと思っている受講者にとってはむしろ阻害因子になりかねないということになる。そこで2007年度後期からは対面指導の時間の義務化をはずした。確かにこうすると教員と受講者との人的結びつきが希薄になり、従来型の授業の観点から見ると教員側の達成感が不足するのであるが、従来とは別次元の授業が展開されているのであるから、評価の観点も変えなくてはならないという

ことになるだろう。最近では、対面授業部分がないことへの心配ではなく、むしろ教員の存在を排した完全自律学習を示唆するなど、担当教員の意識が変化してきている。これがもし実現すれば、浮いた教員を他の科目の充実に回すことができる上、必要に応じて非常勤講師削減等の大学の施策にも応えられるかもしれない。

次に、2006年度後期、2007年度前期においては、中間試験を教材外から出題する実力試験としていた（定期試験も実力試験）。これは、「ぎゅつとe」からの紙での印字が著作権的に困難だったからである。しかし、2007年度後期からは、教材内から問題を作成し、コンピュータ上で実施できるようになった。しかも、サーバ側で自動採点となり、教員による採点の手間も省けるようになった。このように教材から出題されることとなると、通常の学習にもそれだけ力が入ることが期待できる。

最後に、義務化する学習分量であるが、学習の実質を確保できるかどうかの重要な問題であり、次節で扱う。

## 6 学習の習慣化

一見いいことばかりであるように見えるコンピュータ利用の自律学習であるが、そうとばかりは言えない。一番の問題は、授業時間内の学習だけでは時間が足りないようにして授業外での学習を促し、学習の習慣化を図ることが意図されているにもかかわらず、2006年後期、2007年前期においては、コンスタントに学習せず、学期終了間際になって駆け込み的に学習する者が続出した。全体の90%以上の問題を4ヶ月弱にわたる学習期間の最後の数日でこなすといったとんでもない受講者が多かった。しかも、大抵の場合、リスニングが問題文音声の流れる時間よりも短い2秒程度で解答していたり、リーディングの200-300語という分量の文章を毎分8000語で読んでいたり（つまり読まずに設問へ移る）、リーディングについて10問あるはずの大問を5秒で解いていて正解の選択すら行っていないと思われたり、全く学習せず、電子記録的な辻褃合わせをしたに過ぎないことがわかった。

原因は2つある。1つには、中間試験が教材外からの出題だったので、試験範囲まで教材の学習を進めておく必要がなかった。もう1つは、全体の70%終了というノルマがチェックされるのは学期末だけだったということである。これの改善を図るため、2007年度後期においては、

中間試験（教員によって2～4回）を教材内から出題することとし、さらに、中間試験前日までにその試験範囲の学習を終了していないと単位を与えないこととした。

この結果、2007年度後期の授業（11月現在）では、ほとんど学習を進めていないという学習者はほとんどいなくなった（いるとすれば単位は認定されない）。中間試験は教材内から出題されるのであるし、試験前日までに試験範囲の学習を終了させなければ単位が出ないのであるから当然である。これは学習の習慣化という観点からも歓迎すべきことである。毎週こつこつとコンスタントに学習を進めるのが最善である。

ところがである。筆者の場合、学期中に3回の中間試験を予定しているが、1回目の中間試験までの学習データを見て愕然とした。教材に登録されている受講者102名の週当たり平均学習時間は次のようなことになっていたのである（10月1日（月）が授業の初回であり、第1回の中間試験日は10月29日。毎日午前3時頃にサーバがそこまで24時間の学習履歴を計算するようになっている）。

- ・第1週（授業日10月1日）：（10月1日午前3時～10月8日午前3時） 33分
- ・第2週（祝 日10月8日）：（10月8日午前3時～10月15日午前3時） 48分
- ・第3週（授業日10月15日）：（10月15日午前3時～10月22日午前3時） 98分
- ・第4週（授業日10月22日）：（10月22日午前3時～10月29日午前3時） 235分

第1週目はオリエンテーションがあったため、授業時間内の自律学習時間はだいたい上記程度であったから、授業以外ではほとんど学習していない。第2週目は8日が祝日で授業がなかった週であるにもかかわらず、授業外で48分学習しているが、事前に他の週と同程度の学習を行うように指導していたにもかかわらず、授業時間の半分程度の学習でしかない。第3週目は授業で90分近くの学習をしているはずなので、授業外ではほんのわずかししか学習していない。ところが試験前最後の第4週目では、授業時間を差し引くと、授業外で2時間半程度も学習している。これだけ1週間で時間がかけられるなら、他の週の学習時間を少し増やし、各週均等に時間をかけるとすると、1週あたり104分で済んだ計算である。これなら、授業時間を90分とすれば授業外での学習時間が15分でも試験範囲の学習が終了できるはずである。コンスタントな学習が習慣化すれば、比較的少ない負担で学習できるはずなのだ。試験の直前に追い込みをかけると、他の授業の学習に悪影響を及ぼしかねな

い。第1回中間試験が終了すると、第5週目は56分、第6週目は66分、第7週目は57分などと、元の木阿弥になっている。

また、学習回数（ここではログイン回数）の平均で見ても、似たことが確認できる。

- ・第1週：2.46回
- ・第2週：2.13回
- ・第3週：2.92回
- ・第4週：6.47回

このあと第5週目は4.95回となっているが、これは中間試験の実施上新たなログインが必要だからであり、第6週は2.37回、第7週は1.99回となってしまうている。

但し、これらの数値でひとつ注意すべきことがある。もしかしたら、中間試験範囲の学習自体は短い学習時間でも足りているが、試験直前の週は復習に時間を割いたために学習時間が長くなったのかもしれない。そこで問題をどれだけこなしたかを見ておく。

- ・第1週：リーディング0.6問、リスニング10.0問、グラマー16.3問
- ・第2週：リーディング1.1問、リスニング17.6問、グラマー17.3問
- ・第3週：リーディング2.3問、リスニング47.0問、グラマー43.9問
- ・第4週：リーディング5.8問、リスニング122.7問、グラマー37.0問
- ・試験範囲：リーディング10問、リスニング200問、グラマー100問

このデータからは、やはり学習の進捗がコンスタントでなく、直前に極端な追い込みを見せたと理解できる。なお、グラマーは取っつきやすかったのか、早めに進行し、第4週がピークというわけではなかった。

結局このようにコンスタントでなくむらのある学習は、中間試験で学習分量の関門ができたのに合わせて、追い込みが学期末だけでなく、中間試験のたびに繰り返される傾向がわかった。こうなると週毎に関門を設ける必要があるかもしれないが、そこまで行くと何かの都合や体調の悪い週があれば即座にこの科目が不合格という事態になりかねず、これ以上関門のサイクルを短縮することは必ずしも現実的と言えない面がある。だが、日々の学習を着実に進めてもらうことは肝要なので、何らかの手を打つ必要があるものと考えられ、関門を例えば2週間サイクルで設けた上で、必須とする消化問題数はやや低めに抑制するというやり方を提案しておく。

## 7 成績評価

この科目の2007年の全クラス共通の成績評価方法は概ね次のように了解されている。

- ・試験60 定期試験（実力試験）＋中間試験2～4回（教材を範囲に）
- ・学習40 消化状況＋正解状況＋学習安定状況＋出欠状況、など

さらなる詳細については、受講者の所属学部その他を勘案して担当教員が定めることとしている。定期試験は教材外からの出題、中間試験は教材からの出題となる。因みに学習点について筆者のクラスでの基準を紹介しておく、まず消化状況としては、全問題数の70%を最終的にどれだけ越えることができるかに10点を割り与え、問題数の消化が多いほど得点が高いようにしている。また正解状況についても10点を割り当て、正答率の高低に応じて差をつけることとし、丁寧な解答を促す。消化を急いで誤答が多くなれば得点が少なくなる仕掛けである。学習安定状況にも10点を割り当てて、週毎のログイン回数や消化問題数にばらつきが多いほど得点が低くなるようにしており、コンスタントな学習を促している。最後に出欠状況についても10点を割り与え、授業に出てくることが得点を高める形にしている。遅刻・欠席が5回に達すると単位を認定しない。但し、今後教員のいない状態で自律学習をしてもらうことにもなった場合には、出席という概念自体がなくなることも考えられる。授業時間帯はあくまでそのクラスの受講者が優先的にコンピュータを使用できるだけで、体がその時間帯に教室に来ていなくても、学習が進められるのであれば構わないということになるだろうからである。

## 8 残余の問題とまとめ

以上、九州大学で実施中のウェブ教材の自律学習を内容とする英語科目を概観し、問題点について考察し、解決策を提案した。本稿では考察しなかったが、他にも、早く教材をすべて終えてしまった受講者をどう扱うかというような問題もある。残りの授業時間に何をしてもらうことにすればよいのか、また、学習を終了して以降の残余の学習期間は学習実績がなく、学習安定状況を不良と見なすのか、といったことが問題になる。こうした点についての考察はまた機会を改めたい。